

序にかえて

「生・病・老・死」から観た介護論

女子栄養大学教授 板谷幸恵

女子栄養大学「家政学部」は、昭和36年度第1回生が入学し、39年度が最後の入学生となり、わずか4回生までの存在でした。私は、新しい「栄養学部」を後ろに見ながら「家政学部」最後の学生として卒業しました。同時に女子栄養大学助手補として採用され、以来47年間本学の教育に携わって参りました。そこで短期大学、一部・二部、栄養学部一部・二部の家庭科・保健科の教職課程に関する教育実習や学校保健健康教育その他を担当して参りましたが、平成2年に短期大学の家庭科・保健科の教職課程が廃止され、また栄養学部二部も平成28年入学生を以って閉じることが決まりました。時代は大きく変化しました。私は現在は、介護論や介護等体験実習などの科目も担当しております。大介護時代の到来に向けて、介護に関する問題意識を少しでも学生に持たせたいという思いから始まった介護論の授業も15年近くなりますが、時宜を得たすばらしい授業科目であったと思います。

教育は、人間関係の基本的パターンの一つです。人間は、生物的存在ですから時間的変化の過程をたどります。人間にとって絶対に避けることの出来ない「生・病・老・死」という諸相を巡る4つの現象過程です。すでに「生」を得た人間は、「病」や「老」を体験しつつ最後に「死」を迎えるわけです。そして人間の存在は、「個」ではありませんから、この4つの諸相を巡る過程では、多くの人間が同じ「病」または「老」の進行段階に差し掛かる場合もあれば、異なる場合もあり、その状況は、文字通り「千差万別」であります。生物的存在としての人間の変化は、個人（個体）としての一人の変化ではなく多くの人間の複雑多様な変化です。従って個人のまたは集団の「生・病・老・死」が輻輳することになります。「教育」という活動は、広い意味では、人間対人間の関係状態のことでありますから、当然、生・病・老・死そのものを巡る人間関係活動ということになります。私が担当しています「健康教育」は、人間存在のこの4つの現象に関する領域ということになります。「健康教育」は、

望ましい生・病・老・死を考え、よりよく生きるという活動です。「病と老と死」を拒否し否定して健康を保つことのみ考えることが「健康教育」ではありません。入学してくる学生たちが高等学校で「保健」として学習してきたことは、「病」と「老」をそして「死」さえも拒否し、免れることを願うことを期待しているのです。そのようなことは、「生物的存在」としての人間には不可能なことです。「病にならない人間」「老いない人間」「死なない人間」なんてありません、死ぬまで健康で不老の人間はいません。それは「幻想」にすぎないのです。人間の存在における時間的・空間的過程としての「生」から「死」に至る過程で「病」と「老」は必ず発生します。生と死の間のステップとして病と老をどのように考えるかまたどう対応するかが重要な問題なのです。しかも「個人」としてではなく「集団」として「集団」における「個人」の問題としてどう考えるかが問題なのです。

「健康教育」を単なる知識の授与としてではなく実践を身に付けさせる場面としての意味と価値を持たせて考えるとき人間関係は、介護的場面活動そのものになります。介護は、一方通行であっては意味がありません。介護は、その人がその人らしさで生きることを支援する人間関係学であると思います。「健康教育」も強制的であっては意味がありません。教育が強制であってはならないのと同様に介護も強制的一方的ではありません。人間の病と老に対応するために何がどのように必要かを考えることが出来る学生を育てることが狙いです。

内容のみならず方法もそして目的が等しいことこそ理解しなければなりません。よりよく生きるための「健康教育」は、どうあるべきか、またそれを支えるための介護のあり方を考えるとき、私の担当してきた「健康教育」と「介護論」のコラボレーションが生まれるのです。

女子栄養大学での51年間の幸せに感謝し、香川栄養学園のますますの発展を祈念致します。